

# Reconsideration of "Ibasyo" and Development of "Ibashi" Scale

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/39154">http://hdl.handle.net/2297/39154</a>

# 居場所概念の再構成と居場所尺度の作成

原田 克巳・滝脇 裕哉\*

## Reconsideration of “Ibasyo” and Development of “Ibasho” Scale

Katsumi HARADA and Yuya TAKIWAKI

### 問題と目的

学校現場において、不登校児童生徒数は年々増加し、平成13年度の国公私立の小中学校の不登校児童生徒数が13万9千人と過去最高を更新するなど、憂慮すべき状況にある。また、近年、不登校の児童・生徒の人数は増減を繰り返しており、いまだに決定的な対応策が見出せないでいる状況である。

学校不適応対策調査研究協力者会議報告の“登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して—”(文部科学省,1992)において、学校は、児童生徒にとって自己の存在を実感できる精神的に安心していることのできる場所、「心の居場所」としての役割を果たすことが必要であると述べられている。また、不登校問題に関する調査研究協力者会議の“今後の不登校への対応の在り方について(報告)”(文部科学省,2003)では、学校は児童生徒が不登校とならない、児童生徒にとって魅力ある学校づくりを主体的に目指すことが重要であると述べられており、具体的には、児童生徒にとって、自分が大事にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる“心の居場所”として、さらに、教師や友人との心の結び付きや信頼感の中で主体的な学びを進め、共同の活動を通して社会性を身に付ける“絆づくりの場”として十分に機能する魅力ある学校づくりを目指すことが求められる、と述べられている。

さらに、中島・廣出・小長井(2007)は、子どもの社会問題に関する記事数と居場所に関する記事数とを関連づけて、居場所という言葉の使用と“登校拒否・不登校”問題は関わっていると考えられると述べている。このように、不登校への対応のあり方におけるキーワードとして、近年居場所が取り上げられている。しかし、居場所という概念は多義的であり、そのために、様々な観点から様々な目的に応じて定義づけがなされている。したがって、居場所を視点とした支援を考えるためには、どのような体験を得ている場を居場所と捉えるかを整理し直し、居場所の保持の程度を把握できるようにする試みが必要である。

そこで、本研究では、不登校問題等、児童生徒の学校生活における適応に関わる問題をより理解し、より効果的な適応支援を検討するための一つの筋道として、居場所に関する先行研究を概観・整理し、居場所概念を再構成するとともに、再構成された概念に基づいた居場所の保持の程度を測定する尺度を開発することを目的とする。

### 居場所概念の再構成

#### 1. 従来の居場所概念の定義

これまでに居場所は様々な定義づけられている。梶原(1993)は、学校は心の居場所としての役割を果たすことができなければならないとした上で、心の居場所は教師と子どもとが人

間愛で結ばれ、学校が児童生徒にとって自己の存在感を実感でき精神的に安心していることができる場としている。萩原(1997)は、居場所とは「私」とひと・もの・こととの相互規定的な意味と価値と方向の生成によってもたらされる「私」という位置である」としている。竹森(1999)は、心の発達において重要となる「抱え」る機能を持つものとして居場所を捉え、居場所とは「自分自身のありのままが生かされる場であり、関係である」と述べている。木全(1999)は、「家庭及び地域社会における「子どもたちの居場所」の土台の上に学校生活があった。その関係の中に位置づいてこそ学校が「居場所」たり得たのであり、教育の場になり得た。いまその土台が崩れているがゆえに社会的な課題として「心の教育」が問われなければならない状況を生み出しているのではないか」との問題意識から居場所について述べており、「自分の安全を守り、休息と新しいエネルギーの補給をしてくれる環境の部分」が居場所であると述べている。また、「心情・気持」の面からの意味が含まれて初めて教育的意義を持つ居場所概念が成立するのであり、居場所概念は同時に、時間的概念ともいえれば、関係概念ともいえると述べている。藤竹(2000)は、居場所をそこにいると自分であることが確認できる場所のことであると述べている。田中(2001)は、居場所は他者との関わりのなかで自分の位置と将来の方向性を確認できる場と述べている。宮下・石川(2005)は、居場所を自己の存在感を実感でき、精神的に安心していることができ、ありのままの自分を受け入れてくれ、かけがえのない自分の価値を大事にしてくれる場所と述べている。林(2006)は、児童生徒たちが、主観的にある場所で「自分という存在を実感すること」、そしてそこで「落ち着き、安心できる」ことを実感できることが、基本的な必要十分条件であると考えている。

## 2. 居場所もしくは居場所感を測定する尺度

これまでの研究には、以上のような記述的定

義の他にも、質問紙調査によって居場所を量的に測定し、他の心理学的特性との関連を検討することで、居場所のありようを実証的に検討しているものも多くある。

中西(2000)は、居場所を“自分という存在を尊重し、他者とのつながりが存在している個人の安定した心理状態を表すもの”と定義し、気を遣わないでいられること、心が安定していることなどを表す“安心感”，周囲から自分の存在が重視されていることを表す“役割感”，周囲における自分の存在の受容を意識していることを表す“受容感”の3因子からなる“居場所感尺度”を作成している。

秦(2000)は、居場所を“安心感、受容感を感じることで本来の自己を表すことができ、自分の役割を認識することで自己の存在を確認することのできる場”と捉えている。また、“物理的な場所とそこにいる個人の安心した心理状態の両方を含んだものであり、なおかつ、そこでは他者とのつながりが存在している”とも捉えており、この居場所があるという感覚を“居場所感”と呼び、“居場所感尺度”を作成している。

堤(2002)は、居場所とは“単なる物理的空間としての「場所」ではなく、自分が「居る」ことのできる、つまり自己の存在性を実感できる心理的場”であると述べ、“自と他が交錯する場のことであり、それを通して自分という感覚が広がったり狭まったりする、力動的な場のこと”であると捉えている。そして、居場所の感覚は“ここは自分の居場所ではないという否定的意識を通してこそ実感されている”との捉えから、自分が周りの人たちから疎外されているという感覚を表した“対他的疎外感としての居場所のなさ”と、意識が主として自己に向けられた否定的な感覚を表す“自己疎外感としての居場所のなさ”の2因子からなる“居場所がない”感覚尺度”を作成している。

大久保・青柳(2002)は、居場所があると感じることを適応していると感じることと同義とみなして、中学生、高校生、大学生を対象にして、

居場所の視点から適応感を測定する“青年用居場所感尺度”を作成している。青年用居場所感尺度は、周囲になじめていたり楽しい時間を過ごせているという感覚を表す“居心地の良さの感覚”，将来役に立つことが学べたり、成長できると感じたりする感覚を表す“課題・目的の存在”，周りから期待されたり必要とされたりしている感覚を表す“被信頼・受容感”，周りに迷惑をかけたり自分はだめだと感じたりする感覚を表す“劣等感のなさ”の4因子で構成されている。

田中・田嶋(2004)は、中学生を対象にして、居場所があると感じられる際に認知される場の特徴を問う“居場所の特徴を測定する尺度”を作成している。“居場所の特徴を測定する尺度”は個人要素と場所要素に分類されており、個人要素は、他者から自分の存在を受け入れられたり、関心をもたれたりすることを表す“受容・関心”，生徒自身の充実感を表す“充実感”，他者への共感や仲間意識を表す“共感・連帯感”，周囲からの評価のなさやありのままの自分で行われることを表す“評価のなさ・自然な自分”，孤立感の否定を表す“非孤立感”の5因子で構成されている。場所要素は、なごやかな雰囲気を表す“なごやかさ”，明るい雰囲気を表す“明るさ”，その場所が自分たちのものであると感じる独占感を表す“独占感”の3因子で構成されている。

杉本・庄司(2006)は、小学生、中学生、高校生を対象に、現代の子どもの居場所の様相を明らかにするため、居場所を“いつも生活している中で、特にいたいと感じる場所”と定義し、“居場所の心理的機能を測定する尺度”を作成している。居場所の心理的機能は、その場所に自分を受け入れてくれる他者がいることを表している“被受容感”，無理をしない本当の自分で行われる状態，それによって引き起こされる良い精神状態を表している“精神的安定”，自分の好きに、自由に行動できることを表している“行動の自由”，考える、思考するということを表し

ている“思考・内省”，自分に自信を持てることを表している“自己肯定感”，他人を気にせずに行われることを表している“他者からの自由”の6因子から構成されている。また，“自分ひとりの居場所”“家族のいる居場所”“家族以外の人のいる居場所”の3つの場ごとに心理的機能のありようについて検討している。その結果，“自分ひとりの居場所”では，“行動の自由”“思考・内省”“他者からの自由”が高く，“被受容感”“自己肯定感”が低い傾向があり，“静的な居場所”と表現している。“家族のいる居場所”では，“被受容感”が高いことが示されたが，他の機能も比較的高いことが示され，様々な機能を備えた“安定した居場所”と表現している。“家族以外の人のいる居場所”では，“被受容感”“自己肯定感”が高く，“行動の自由”“思考・内省”“他者からの自由”が低いことが示され，“自分ひとりの居場所”とは逆に“動的な居場所”と表現している。

則定(2007)は，“青年版心理的居場所感尺度”の作成を試みている。重要な他者(母親・父親・親友)について、それぞれ同一の項目で検討したところ、心理的居場所感として“本来感”“役割感”“被受容感”“安心感”の4因子を抽出している。

石本(2010)は、青年期における居場所感が心理的適応や学校適応にどのような影響を与えるのかを検討している。教育臨床や心理臨床の領域では、個人が他者との関係に対する意味づけにおいて、“ありのままにいられる”ことと、“役に立っていると思える”ことを居場所の心理的条件としていることから，“居場所感尺度”を作成している。居場所感尺度は、自分が必要とされていると思える、役に立っていると思えるといった意味内容を表す“自己有用感”，ありのままにいられる、自分らしくいられるといった意味内容を表す“本来感”の2因子で構成されている。

これらの居場所の実証的研究を踏まえると、居場所は学校適応や精神的健康など、自己の生

活の質を高める要因に関連があることが示唆されている。また、尺度からは、認められる、必要とされるといった自己有用感、自分には役割があると感じる役割感、ありのままにいられると感じる本来感、自分が受け入れられていると感じる被受容感、孤立することなく周囲に溶け込めていると感じる帰属意識、安心を実感できる安心感、自分に自信を感じる自己肯定感などにより、主体が居場所であると実感できることを示唆している。

### 3. 居場所がもつ二つの方向性

上述した、梶原(1993)、萩原(1997)、竹森(1999)、藤竹(2000)、田中(2001)、堤(2002)、宮下・石川(2005)、林(2006)の定義では、居場所は自分の存在や価値、位置を実感できたり確認できたりする場であることが共通している。また、梶原(1993)、中西(2000)、秦(2000)、宮下・石川(2005)、林(2006)の居場所では、居場所には安心できたり、落ち着くことができたりする心理の状態も含まれるように定義されている。これらを踏まえると、居場所は、自分の存在を確認できたり、自分に価値を見出したりしていく中で自己像を確かなものにしていくものであり、自己像を確かなものにしていくことで、安心感や落ち着きを生じさせていくものであると想定できる。このように、居場所には自己実現へと向けて自己像を確かなものとしていく役割があるといえる。

一方で木全(1999)は、居場所を自分が守られている状態であり、さらに休息とエネルギーを補給してくれる場であるとしており、アジールの場として居場所を捉える考え方もある。

このように、これまでの居場所の定義には、自己実現へと向けて自己像を確かなものとしていくものとしての居場所と、これまであまり十分に触れられていないが、休息とエネルギーを補給してくれるものとしての居場所があり、大きく二つの方向性が見られる。この二つの方向性をより明確に示した居場所概念として、住田・南(2003)と安斎(2003)のものがある。

住田・南(2003)は、居場所を“消極的意味合い”と“積極的意味合い”の二つの方向性で考えている。消極的意味合いの居場所とは、不登校の子どもが慰安、休息を得るために必要な避難所・逃避場所といった意味での居場所である。そして、積極的意味合いの居場所とは、私生活への傾斜による生活の個別化や個人化が進み、他者との関係が希薄化したことによって、自己意識の不確かさや自己の不安定化などを招いたことで、自己の安定化を図るために自己を包み込んでくれる他者との関係という可視的な事実が必要とされてきているという認識から想定される居場所である。そして、この積極的な意味をもつ居場所は、自己回復の場、自己承認と自己確認の場、自己安定化の場となる場であるとしている。つまり、住田・南(2003)の指摘は、居場所が、避難所・逃避場所といった意味だけではなく、自己を包み込んでくれる他者との関係がある場所といった意味も内包されるようになったことを示している。

安斎(2003)は、居場所には“前向きな居場所”と“後ろ向きな居場所”という二つの方向性が内在しているとしている。前向きな居場所とは、自分の自己像を修正し、自立していく場であり、集団の中で子どもがいきいきと自己発揮する場である。そしてそれは、学校不応対策調査研究協力者会議報告の“登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して—”(文部科学省、1992)における心の居場所として挙げられた、“自らが『必要とされる存在』であることを感じることができるような場”や“一人一人の子どもが集団のなかで生き生きと活動できる場”などが該当する場であると述べている。一方、後ろ向きな居場所とは、居られない場から逃げだし、立ち止まって心の安定を図る場であり、安心して身を置くことができ、傷を癒し、回復するために必要な場である。

住田・南(2003)のいう積極的な意味合いの居場所は、自己支持的な他者の存在により自己

意識を確かなものとしたり、自己を安定化させたりする機能がある場である。安齊(2003)のいう前向きな居場所は、集団や他者から必要とされるように自己像を修正しながら自分らしく生き生きと生活できる場である。積極的な意味合いの居場所と前向きな居場所では、居場所には自己を必要としてくれたり、認めてくれたりするような自己支持的な他者が存在する場であることが類似している。つまり、他者の存在により、自己を肯定的に捉えることで、自己にまとまりを与えることができる場が居場所の一つの側面であるといえる。

住田・南(2003)のいう消極的な意味合いの居場所と安齊(2003)のいう後向きな居場所には、居られない場から避難して、自らの傷を癒し、エネルギーを回復することで自己を安定させる機能があることが類似している。この居場所は、日常の人間関係における傷つきや疲れなどから生じる生きづらさを実感したときに必要であると考えられ、居場所のもう一つの側面であるといえる。

このように、居場所には①自己像や自己概念を確かなものとしていく方向性と、②居られない場から逃げ出して休息とエネルギーを得ることで自己を安定させる方向性があるといえる。

#### 4. 「居場所がない」という感覚

岩川(2006)は、居場所の喪失を空気の欠如にたとえ、“空気も居場所も、それがあたりまえのようにあるうちは誰も気にとめないが、それがほんとうに奪われてしまえば、もはや生きていくことさえできないものだ”と述べている。そして、漠然とした生きづらさの感覚に“居場所がない”という言葉がフィットしていると述べている。そして、“ここが居場所だと客観的に定義できる居場所があったりなかったりするのではない。たしかに「ある」といえるのは、「居場所がない」という言葉と響き合うような人びとの喪失感や危機感、あるいはそうした存在の感覚と見合うような社会の変容なのである”と述べている。同様に、北山(1993)は、“自分が自分

でいるための環境”を居場所とし、居場所について、居場所があるところでは“自分は「自分があるなあ」とは思っていない”と述べ、“いつもそのような居場所を失ってはじめて「自分がない」と分かるようなことが多く、それが与えられるときも、過去形であるとき「自分があった」というしかない”性質を持っていると述べている。さらに堤(2002)も、居場所の感覚は、ここが自分の居場所だという肯定的感覚よりは、むしろ“ここは自分の居場所ではないという否定的意識を通してこそ実感されている”と述べている。

これらの指摘を踏まえると、“自分がある”“本当の自分”というような自分が思い描いている自己の存在や自分らしさが失われていくことで、“居場所がない”と実感されると考えられる。つまり、居場所が実感されるのは、“居場所がない”という感覚に陥ったときであるといえる。居場所を保持しているときは意識の外で潜在的に居場所を実感しており、居場所がない状況で初めて目の前に居場所の輪郭が浮かび上がってくるといえる。つまり、居場所という言葉が実感を伴って現れるときというのは、生きづらさを実感するなど、自己がバラバラになってしまうような否定的な自己意識が高揚されたときであるといえよう。逆に言えば、居場所をもっている状態というのは、自分らしさを実感し、自己にまとまりがある状態であるといえよう。

このように捉えられる居場所は、コフト・Hの自己対象体験の概念と類似している。コフト・Hの理論を簡潔に示しているアーネスト・S・ウルフ(1988 安村・角田訳 2001)によると、自己対象体験とは、自己が自己の構造のまとまりと凝集性を得るために、周囲の環境からの自己への自己支持的な反応によりもたらされる体験のことである。居場所がある状態は、自己の存在を確認や実感するために、自己や自分らしさを喚起、維持することができる周囲との関係性が形成されている状態である。つまり、自己への自己支持的な自己対象の反応による豊

かな応答性が周囲にある状態であるといえる。これらをふまえると、居場所は、自己にまとまりと凝集性を得られるような体験ができる、自己支持的な場であると考えられる。

#### 5. 自己意識と居場所の二つの方向性との関連

否定的な自己意識が高揚されたときに“居場所がない”と実感するため、居場所感覚は注意が自己に集中したときに意識上に出現するといえる。居場所は自己にまとまりをあたえるものであるため、現実の自己と理想の基準との間にズレを認知したり、自己不一致を経験したりしたときに否定的な自己意識が高揚されていくと、自己にまとまりをあたえられなくなり、“居場所がない”という形で実感すると想定できる。辻(1993)は、自己不一致の状態は、なんとかしてこの不一致をなくそうと努力する“不一致の低減”，もしくは、それが不可能な場合には、注意を自己以外のものに転導して自己意識の高揚を回避しようとする“自己意識の回避”を動機づけている。

現実の自己と理想の基準との間にズレを認知したときにそのズレの低減をはかることや、自己不一致を経験したときに不一致をなくそうと努力することは、自己と向き合い自己像を修正しながら適応していく過程であるため、自己支持的な自己像や自己概念を形成する居場所を保持しようとするときに実行する行動であるといえよう。つまり、自己不一致の低減や解消への努力をすることは、居場所概念における、自己像や自己概念を確かにしていく方向性と関連しているといえよう。

一方、自己意識の高揚状態を免れようと注意を他に逸らすことは、自己像を修正していくことがかえって自己をバラバラにしてしまう危険性を伴う際に、自己にまとまりを与え続けるための手段であると言える。つまり、自己のまとまりを失うように自己像の修正を強いられたときに、自己意識の高揚の回避や注意の転導をすることは、居場所概念における、居られない場から逃げ出して休息とエネルギーを得ることで

自己を安定させる方向性としているといえよう。

この自己意識の高揚の回避や注意の転導を図るために得られる居場所は、上述したように先行研究ではあまり触れられていない。それは、このタイプの居場所は、行き過ぎると、自分の殻にひきこもってしまうというマイナスの側面があるためではなからうか。しかし、居場所は空気と同じで生存や実存にかかわる問題でもある(岩川, 2006)。生存していく上で注意を逸らし、自分の殻の中にひきこもることで、ギリギリの状態で自己を支えている状況も考えられる。したがって、居場所が自己を支え、自己にまとまりを与えるものであると捉えるならば、居場所の一つの役割として、自己に対する否定的な自己意識から逃避、避難させることにより、自己にまとまりを与えたり、凝集性を保持したりすることも挙げられよう。

なお、辻(1993)によると、自己意識と不可分な関係にあるのが、他者への注意や関心である。自他の比較が自己を意識する契機になるものと思われ、自己意識の背後には、しばしば他者意識が隠れているものなのであると述べている。また、井上・船津(2005)は、「私」というものは認識主体としての「私」なしには存在しえないとした上で、認識主体としての「私」の認識は社会的に形成され、「私」の認識は他者による認識に基づいて行われ、他者を通じて「私」の認識がなされるとしている。このことから、自己を意識したり認識したりする際、他者との関係性によって自己が規定されるといえる。また、住田・南(2003)は、居場所は他者との関係性と空間性を意味的に結びつけ、一体的に組み合わせられた場であるとしている。したがって、居場所概念を再構成する際には、居場所のそれぞれの方向性ごとに、他者存在について留意しながら考えていく必要があるといえよう。

#### 6. 他者との関係性のありようと居場所の関連

居場所はあらゆる関係性の中で形成されるものである。他者との関係性のありようや空間性のありよう、居場所と感じられる意味合いの違いによ

り、居場所を明確に分類した先行研究もある。

藤竹(2000)は、他者との関係性がある居場所を“社会的居場所”，他者との関係性がない居場所を“人間的居場所”と分類している。社会的居場所とは、自分の資質や能力を発揮することが求められ、自分の存在が他者によって必要とされている場所であるとしている。また、人間的居場所とは、自分であることをとり戻すことのできる場所であり、そこにいると(そこに帰ると)安らぎを覚えたり、ほっとすることのできたりする場所であるとしている。

また、中島他(2007)は、人間がもつ重要な要素である“他者との関わり”の視点から、居場所を“社会的居場所”と“個人的居場所”に分類している。社会的居場所は“他者との関わりをもつことで自己を確認できる場所”であり、個人的居場所は“他者との関わりから離れて自己を取り戻せる場所”である。

なお、藤竹(2000)は、他者との関係性がないということは一人だけであるということを目指しているのではなく、そこに他者が存在したとしても、その他者を“他人”として意識せずに、裸の付き合いのできる人間として互いに接し合える場合は、その他者は他人とはならず、そのような他者という場合は、人間的居場所と捉えられるとしている。また、中島他(2007)のいう個人的居場所も、藤竹(2000)の人間的居場所と同様であり、気の許せる仲間はそうでない他者とは区別されており、気の許せる仲間と共にいて自己を取り戻せるような場の場合は、その場は個人的居場所と捉えられるとしている。つまり、藤竹(2000)も中島他(2007)も、他者の存在の有無ではなく、他者との関係性のありようの違いによって居場所を区分しており、両者の考えをまとめれば、主体が他人であると意識している他者と関係がある社会的居場所と、一人でいたり、主体が他人ではないと意識している他者と関係があったりする人間的居場所・個人的居場所とに分類していると言える。

さらに、藤竹(2000)、中島他(2007)それぞれの

社会的居場所に着目すると、両者は、自分のパフォーマンスなども含め自分の存在を他者に認められたり受け入れられたりする体験を通して、自己を確認できる場であるということが類似している。また、藤竹(2000)の人間的居場所と中島他(2007)の個人的居場所に着目すると、両者は、他人と意識する他者との関わりから離れ、安心したり落ち着いたりすることで、自己を取り戻せる場であることが類似している。これらの類似点から、他者との関わりがある社会的居場所は、他者からの自己支持的な反応を得ることで自己を確認していくことによって、自己像や自己概念を確かなものとしていく方向のものであり、他人と意識する他者との関わりがない人間的居場所・個人的居場所は、安心できる空間で自己を取り戻していくことを求めて、居られない場から逃げ出して休息とエネルギーを得ることによって、自己を安定させる方向のものであるといえよう。

## 7. 他者存在の有無による居場所概念の整理

藤竹(2000)と中島他(2007)は、人間的居場所・個人的居場所において、気の許せる仲間は他人ではないという立場に立っている。これは、主体がありのままにいられる場という特徴に目を向けることにより、分類しているからであろう。つまり、①主体がありのままの自己を表現しても受け入れてくれる親しい他者がいてくれることによって自己を取り戻せる場と、②主体が一人でいてありのままにいられることによって自己を取り戻せる場、という二つの要素が、人間的居場所と個人的居場所に本質的に共通する点であり、両者の構成要素であると考えられよう。

アーネスト・S・ウルフ(1988 安村・角田訳2001)は、自己を支える機能はしばしば自己支持的な他者の存在によりもたらされるとしている。また、辻(1993)は、自己概念は、重要な他者からの期待や価値づけを取り入れながら、自己の経験から得た自己関連情報を、概念化し構造化したものであると述べている。

したがって、人間的居場所・個人的居場所の



前者の構成要素は、ありのままの自己を受け入れられるという自己支持的な他者の反応により、自己にまとまりを与えるものであると言える。

一方、人間的居場所・個人的居場所の後者の構成要素は、一人でいることでありのままにいられることにより、自己にまとまりを与えるものであると言える。一人でいることによって居場所を感じることは、否定的な見解もある。若山(2001)は、ひとり居場所は、しばしば“ひきこもり”、あるいはその延長線上にある“閉じこもり”の舞台となってしまうと述べている。また、山岡(2002)は、一人になれる場所や時間を持つことの重要性を指摘した上で、他者との関係性から切り離されたところに居場所を求める心性の裏には、心理的問題が潜んでいることも考えられるとしている。これらの見解からうかがえることは、一人でいられる場は、最後に残された唯一の居場所になりがちであり、それゆえに心理的なリスクが危惧されるが、その場を失うことはさらに深刻な病的・犯罪的なリスクを伴うほどの実存的な問題を生じさせるという、重要な場であるということである。

他者との関係がある居場所では、このような特徴は見られない。したがって、他者との関係がある前者の構成要素と、他者との関係がない後者の構成要素は、ありのままにいられるということにおいては共通しているものの、質的に大きく異なったものであると考えられよう。

このように二つの構成要素の特徴を見てみると、他者との関係性のありようではなく、他者の存在の有無によって居場所を分類することが望ましいと思われる。

前者の構成要素は、他者との関係により自己にまとまりがもたらされるものであるため、ありのままを受け入れられる関係を保持させた上で、社会的居場所を含めることができよう。つまり、社会的居場所は、どのような場合であっても他者との関係があるものとして捉えることが可能であり、「他者から得られる自己対象に触れることにより、自己の存在や自分らしさを確

認できることで自己にまとまりを与える体験ができる場」と定義し直すことができよう。

一方、後者の構成要素は、居られない場から逃げ出して一人でいることで、傷つきや疲れから離れ、休息によるリフレッシュでエネルギーを得ることによって自己を安定させる場として、これのみをもって個人的居場所と捉えるのが妥当であろう。したがって、個人的居場所は「一人になることで、情緒を安定させたり、自己受容したりすることにより、自己の存在を確認し、自分らしさを取り戻せることで自己にまとまりを与える体験ができる場」と定義し直すことができよう。

#### 8. 社会的居場所の再構成

社会的居場所を構成する要素をより精緻に検討するには、より具体的な関係、時間、場などを想定した居場所像を描かなければならない。本研究では、社会的居場所を「他者から得られる自己対象に触れることにより、自己の存在や自分らしさを確認できることで自己にまとまりを与える体験ができる場」と捉えるが、どのような自己支持的な他者との関係により、どのように自己にまとまりが得られるのかという視点で、より明確化する必要がある。

実証的研究からは、自己有用感、役割感、本来感、被受容感、帰属意識、安心感、自己肯定感などが居場所感に関連する感覚として見出されている。

自己有用感、役割感は、他者との関係の中で、自分がなしたことを他者が認めてくれることによって、自分が有用な存在であると実感したり、自分が役に立っていると実感したりすることができ、自己の存在に価値が見出され、自信が得られると考えられることから、社会的居場所を構成する一つの要素であるといえよう。

また、本来感、被受容感は、自分の弱さも含め何でも受け止めてくれたり、自分を大切にしてくれたりする他者が存在することにより、他者から自分が受け入れられていると実感する感覚であり、自己にまとまりを与える大切な感覚

であるといえる。また、自己有用感や役割感が他者から良い評価をしてもらえようようなパフォーマンスの上に成立する性質があることに対して、被受容感、そのようなパフォーマンスの有無やできばえに関係なく、ありのままの自分の存在を受け入れられる関係があつて得られる感覚であり、上記とは別の社会的居場所を構成するもう一つの要素といえるであろう。

加えて、宮下・石川(2005)は、学校の中において心の居場所はいろいろあるが、その根底には、どこかに所属していたいという気持ちがあるのではないかと述べている。山岡(2002)もまた、周りから認められたり、自分が活躍できたりするなどの積極的な居場所を見いだせる場合はもちろん大事なことであるが、それ以前に“一人じゃないのだ”という安心感を必死で求めており、一生懸命どこかに所属しようとしがみついている場合も多いのではないだろうかと述べている。このことを踏まえると、どこかに所属することによって一人ではないという安定感を実感することで、自己にまとまりを与えることができると考えられる。つまり、社会的居場所の構成要素として、良く評価されたり、ありのままを受け入れられたりする他者の存在とは別に、一人ではないという安心感を得られる、所属することができる集団やグループがあるという帰属意識もあげられよう。

なお、自己肯定感、あらゆる関係において、結果的に自らを肯定的に捉えられる感覚であると言えあるため、居場所に密接に関係するものではあるが、居場所を構成する要素とは別のものとして捉える必要があろう。

以上のことから、社会的居場所は、①自己のことを認めてくれる他者、②自己のことを受け入れてくれる他者、③自己が所属できる他者の存在により、それぞれ、①自己有用感や役割感、②被受容感、③帰属意識、を実感することで、自己にまとまりを与えることのできる場であると捉えられる。したがって、社会的居場所は次にあげる3つの要素から構成されると定義づけら

れよう。

- 1) 承認の居場所：自分の力を発揮し、その成果・業績が他者に認められたり、他者の役に立ったりすることで、自己を価値あるものとして実感できる場。
- 2) 受容的居場所：他者に愛され、無条件でありのままの自己が受け入れていることを実感できる場。
- 3) 所属の居場所：何らかの集団やグループに所属していることで、帰属意識を持ち、自己の存在が安定していることを実感できる場。

## 9. 個人的居場所の再構成

本研究では、個人的居場所を、「一人になることで、情緒を安定させたり自己受容したりすることにより、自己の存在を確認し、自分らしさを取り戻せることで自己にまとまりを与える体験ができる場」と捉えるが、社会的居場所の再構成で行ったことと同様に、どのような場、時間によって、どのように自己にまとまりを与えているのかという視点で、より明確化する必要がある。

泊・吉田(1999)は、一人になれる場所を求めることは、何らかの心理的機能を満たそうとしているためであると述べ、一人で専有できる空間には、“休息を意味する緊張解消”“自己を見つめ直し混乱した状況や気持ちを整理する自己内省”“課題や考え事に集中して取り組む課題への集中”の3機能があると述べている。泊・吉田(1999)によると、これら3機能と感情状態の相関関係の検討から、緊張解消の機能は忙しさや束縛感を感じるときに最も必要されている機能である述べている。この緊張解消の機能は、自己意識が高揚したり、自己不一致が生じたりしたときに動機づけられる行動の一つである“自己意識の回避”と関連しているといえよう。また同時に、自己への焦点づけを回避しようしたり、緊張を解消しようしたりするときには、自分の好きなことをして気を紛らわしたり楽しんだりすることはよくあることであり、これは、杉本・庄司(2006)のいう“行動の自由”と“他

者からの自由”に該当するものであると考えられる。したがって、目の前にある問題から注意を逸らし、回避することができる時間や場は、情緒的安定をもたらし、自己にまとまりを回復する機能があるといえ、またそのような時間や場所は、一人でいられる時間や場所として求められるものであるといえるため、緊張解消の機能を持つ一人でいられる時間や場所は、個人的居場所を構成する要素の一つであるといえよう。

また、自己内省の機能は、悩みや将来への不安を抱えているときに最も必要とされる機能であると述べられている。これは自己意識が高揚したり、自己不一致が生じたりしたときに動機づけられる行動の一つである“不一致の低減”と関連しているといえよう。また、杉本・庄司(2006)のいう“思考・内省”に該当するものであると考えられる。井上・船津(2005)は、人間は他者からのレッテルをそのまま受け入れて自分の自我とするわけではなく、他者によるレッテルを媒介に自己を対象化し、“自分自身との相互作用”を行い、レッテルに対して意味を付与し、解釈し、修正を行い、それに基づいて新しい自我を自ら形成しうるようになることと述べている。したがって、思考を巡らし内省をすることにより、自己を受容し直すことができる時間や場所は、自己にまとまりを回復する機能があるといえ、またそのような時間や場所は、一人でいられる時間や場所として求められるものであるといえるため、自己内省の機能を持つ一人でいられる時間や場所は、個人的居場所を構成するもう一つの要素であるといえよう。

なお、泊・吉田(1999)によると、専有できる空間には課題への集中の機能もあるが、この機能はやる気に満ちているときに求められる機能であるとの結果が示されており、本研究における個人的居場所の概念とは合致しない。

以上のことから、個人的居場所は、一人になることで、①緊張解消、②自己内省を、安定的に行えることで、自己にまとまりを与えることができる場であると捉えられる。したがって、

個人的居場所は次にあげる二つの要素から構成されると定義づけられよう。

- 1) 解放的居場所：現実社会から逃避し、自己に休息とエネルギーが補給される場。
- 2) 内省的居場所：自己について客観的に思考や内省を行い、自己を再構成する場。

#### 10. 居場所の安定性

住田・南(2003)は、安定的な、揺るぎのない関係性が具象化した空間が居場所であると述べている。居場所は自己にまとまりを与えるものであるとの観点から見ても、その性質上、自己支持的な関係性が不安定な場では居場所は成り立たないと考えられる。したがって、居場所が成立するためには、自己と自己に支持的な感覚を与えてくれる対象(他者、もの、空間など)との関係が、ある程度安定的なものである必要がある。また、自己が見通しを持ち、自己支持的な感覚が得られる場であるという認識が得られている必要がある。つまり、自己が自己対象を得られる場であると想定できたときに、その場が居場所となると考えられる。

#### 11. 再構成された居場所概念の定義

本研究では、上述したように他者との関係の有無により、居場所の方向性が定まると考えており、社会的居場所を「他者から得られる自己対象に触れることにより、自己の存在や自分らしさを確認できることで自己にまとまりを与える体験ができる場」、個人的居場所を「一人になることで、情緒を安定させたり、自己受容したりすることにより、自己の存在を確認し、自分らしさを取り戻せることで自己にまとまりを与える体験ができる場」とした。つまり、居場所とは、自己支持的な他者との関係から自己像や自己概念をより確かにすることや、否定的な自己意識を喚起させられるような居られない場から抜け出すことによって自己にまとまりを与えることができる場であるといえる。また、居場所は自己を支える上で自己支持的な感覚が安定的に得られるものでなければならないといえる。これらのことから、本研究では居場所を次

のように定義する。

「居場所とは、自己に自己支持的な自己像や自己概念を形成させたり、否定的な自己意識から逃避、避難させたりすることにより、自己にまとまりを与えたり、まとまりを回復したりする体験ができる場である。また、自己にそのような体験ができる見通しをもたせた上で、自己の期待通りに安定的に自己支持的な働きかけが得られる場である」。

## 居場所尺度の作成

### 1. 目的

ここでは、再定義した居場所概念に則って、居場所を社会的居場所（所属的居場所・受容的居場所・承認的居場所）と個人的居場所（内省的居場所・自閉的居場所）に分類し、それぞれの居場所の保持の程度を測定する尺度を作成し、その妥当性を検討することを目的とする。

項目作成に当たっては、再定義した居場所の特性に留意しながらワーディングを行なっている。社会的居場所は、3要素に関わる状況に居心地のよさが感じられる関係があることを尋ね、個人的居場所は、2要素に関わる状況に居心地のよさ感じられる時間もしくは場があることを尋ねることとした。また、これらの関係や時間・場が安定的に存在しているという特徴にも留意し、“いつも”や“いつでも”という言葉を項目の中に入れ含めた。

妥当性の検討に当たっては、居場所があると感じられている場合には、自己肯定感を強く持てることがこれまでの実証研究から示唆されていることから、自己肯定感との関連を見ることで確認することとした。

### 2. 方法

**調査対象** 18歳～23歳の大学生441名（男性262名、女性179名）。

**調査時期** 2012年5月中旬。

**調査内容** 以下に示す3つの尺度、および年

齢・性別・生活形態（一人暮らしの有無）を尋ねた。

1) **社会的居場所尺度** 本研究において再構成された社会的居場所概念に則って作成した項目について、教育学および心理学を専攻している学生8名に内容の妥当性を協議してもらい作成した。社会的居場所は、“承認的居場所”6項目、“受容的居場所”5項目、“所属的居場所”5項目の計16項目で構成されている。回答形式は、“全くあてはまらない”“あまりあてはまらない”“ややあてはまる”“とてもあてはまる”の4段階評定である。

2) **個人的居場所尺度** 本研究において再構成された個人的居場所概念に則って作成した項目について、教育学および心理学を専攻している学生8名に内容の妥当性を協議してもらい作成した。個人的居場所は、“解放的居場所”5項目、“内省的居場所”5項目の計10項目で構成されている。回答形式は、社会的居場所尺度と同じ4段階評定である。

3) **自己肯定意識尺度** (平石,1993) 對自己領域、對他者領域の二つの領域で構成されている。對自己領域は、“自己受容”4項目、“自己実現的態度”7項目、“充実感”8項目の3つの下位尺度からなる。對他者領域は、“自己閉鎖性・人間不信”8項目、“自己表明・対人的積極性”7項目、“被評価意識・対人緊張”7項目の3つの下位尺度からなる。回答形式は、“あてはまる”“どちらかといえばあてはまる”“どちらともいえない”“どちらかといえばあてはまらない”“あてはまらない”の5段階評定である。

**倫理的配慮** 質問紙への回答は任意のものであること、個人が特定されることはないこと、回収したデータの管理には細心の注意を払うことを質問紙の表紙に記載するとともに、調査実施時に口頭で説明し、同意した場合に回答するよう求めた。

### 3. 結果

**居場所尺度の因子構造** 社会的居場所尺度、個

人的居場尺度それぞれについて、尺度の構造を明らかにするために、探索的因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。

社会的居場所では、十分な因子負荷量を示さない1項目を除いた、全15項目3因子構造を得た(Table 1)。第1因子は、何らかの集団に所属していることで帰属意識を持ち、自己の存在が安定していることを実感できることを測定している項目がまとまっており、“所属の居場所”と命名した。第2因子は、他者に愛され、無条件にありのままの自己が受け入れられていることを実感できることを測定している項目がまとまっており、“受容的居場所”と命名した。第3因子は、自己の力を発揮し、その成果が他者に認められたり他者の役に立ったりすることで、自己を価値あるものとして実感できることを測定している項目がまとまっており、“承認的居場所”と命名した。これらの結果は、想定した構成概念に合致する構造であった。

個人的居場所では、一人暮らしをしている大学生にとっては個人的居場所を容易に持つことが可能であるため、一人暮らしをしていない大学生を対象として分析を行い、十分な因子負荷量を示さない2項目を除いた、全8項目2因子構造を得た(Table 2)。第1因子は、自己について客観的に思考や内省を行い、自己を再構成することができていることを測定している項目がまとまっており、“内省的居場所”と命名した。第2因子は、現実社会から逃避し、自己に休息とエネルギーが補給されることを測定している項目がまとまっており、“解放的居場所”と命名した。これらの結果も、想定した構成概念に合致する構造であった。

なお、各因子の $\alpha$ 係数を求めたところ、すべての因子において十分な信頼性が認められた(所属的居場所： $\alpha = .880$ 、受容的居場所： $\alpha = .887$ 、承認的居場所： $\alpha = .874$ 、内省的居場所： $\alpha = .871$ 、解放的居場所： $\alpha = .748$ )。

Table 1 社会的居場所尺度因子分析結果(最尤法・Promax回転)

	F1	F2	F3
いつでも一緒にいられる仲間がいる、居心地のよい関係がある。	.861	-.118	.074
いつでも輪の中に入っていける、居心地のよい関係がある。	.774	.188	-.155
いつでも協力してくれる仲間がいる、居心地のよい関係がある。	.631	-.037	.221
なじんでいるといつも思える、居心地のよい関係がある。	.616	.165	.014
そこにいればいいといつも思える、居心地のよい関係がある。	.541	.226	.033
自分の良いところも悪いところもすべていつも認めてくれている人がいる、居心地のよい関係がある。	-.015	.854	-.032
ありのままの自分をいつも受け入れてくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	.060	.744	.034
自分をいつも大切にしてくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	.190	.694	-.126
自分の気持ちをいつも理解しようとしてくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	-.037	.571	.344
自分の考えや悩みをいつも分かってくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	.043	.531	.249
自分の能力をいつも必要としてくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	.087	-.181	.900
自分のすることにいつも期待してくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	-.092	.129	.738
自分のしたことにいつも良い評価をしてくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	.025	.127	.676
自分をいつも頼ってくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	.362	-.030	.515
自分が活躍することをいつも喜んでくれる人がいる、居心地のよい関係がある。	-.044	.334	.476
因子間相関	F1	-	.698
	F2	-	.701

Table 2 個人的居場所尺度因子分析結果(最尤法・Promax回転)

	F1	F2
将来のことを一人で考えることができる、居心地のよい時間もしくは場がいつでもある。	.854	-.202
自分自身を一人で見つめることができる、居心地のよい時間もしくは場がいつでもある。	.727	.091
過去の出来事を一人で振り返ることができる、居心地のよい時間もしくは場がいつでもある。	.595	.042
自分自身のことについて一人であれこれ考えることができる、居心地のよい時間もしくは場がいつでもある。	.587	.228
その日のことを一人で振り返ることができる、居心地のよい時間もしくは場がいつでもある。	.496	.283
人から離れて一人でストレスを解消することができる、居心地のよい時間もしくは場がいつでもある。	-.146	.869
誰にも邪魔をされずに、一人でのびのびと好きなことができる、居心地のよい時間もしくは場がいつでもある。	.027	.726
嫌なことを忘れ、気持ちを切り替えることができる、一人でいられて居心地のよい時間もしくは場がいつでもある。	.174	.593
因子間相関	F1	-
	F2	.705

Table 3 重回帰分析（強制投入法）結果

	対自己領域			対他者領域		
	自己受容	自己実現的 態度	充実感	自己閉鎖性・ 人間不信	自己表明・対 人的積極性	被評価意識・ 対人緊張
所属的居場所	.073	.047	.311 **	-.562 **	.311 **	-.235 **
受容的居場所	.072	-.166 *	-.081	.048	-.083	.102
承認的居場所	.166 *	.481 **	.265 **	-.064	.299 **	.021
内省的居場所	.163 *	.129 *	.011	.114 *	.011	.063
解放的居場所	.066	.065	.264 **	-.140 *	.057	-.223 **
調整済みR <sup>2</sup>	.162 **	.244 **	.380 **	.341 **	.272 **	.060 **

\*\*p<.01 \*p<.05

各居場所が自己肯定意識に与える影響 次に、社会的居場所尺度、個人的居場所尺度の妥当性を確認するために、自己肯定意識尺度との関連を重回帰分析（強制投入法）により検討したところ、Table 3 に示す結果となった。

所属的居場所については、“充実感”“自己表明・対人的積極性”との間に、それぞれ正の影響が見られ、“自己閉鎖性・人間不信”“被評価意識・対人緊張”との間に、それぞれ負の影響が見られた。所属的居場所をもつことは、充実感と自己表明・対人積極性を高め、自己閉鎖性・人間不信と被評価意識・対人緊張を低めるといえる。

受容的居場所については、“自己実現的態度”との間に負の影響が見られた。受容的居場所をもつことは、自己実現的態度を低めるといえる。

承認的居場所については、“自己受容”“充実感”“自己表明・対人的積極性”との間に、それぞれ正の影響が見られた。承認的居場所をもつことは、自己受容、充実感、自己表明・対人的積極性を高めるといえる。

内省的居場所については、“自己受容”“自己実現的態度”“自己閉鎖性・人間不信”との間に、それぞれ正の影響が見られた。内省的居場所をもつことは、自己受容、自己実現的態度、自己閉鎖性・人間不信を高めるといえる。

解放的居場所については、“充実感”との間に正の相関が見られ、“自己閉鎖性・人間不信”“被評価意識・対人緊張”との間に、それぞれ負の影響が見られた。解放的居場所をもつことは、充実感を高め、自己閉鎖性・人間不信と被評価

意識・対人緊張を低めるといえる。

居場所の保持タイプと自己肯定意識 次に、居場所の保持の仕方と自己肯定意識に妥当な関連が見出されるかを検討するために、居場所の5つの下位尺度得点を用いてクラスター分析を行い、居場所の保持のタイプを3つに分類した。クラスター1 はすべての居場所の得点が高いため、“居場所充足群”，クラスター2 は社会的居場所の3つの居場所得点が低いため、“社会的居場所不足群”，クラスター3 は個人的居場所の二つの居場所得点が低いため、“個人的居場所不足群”と命名した(Figure 1)。

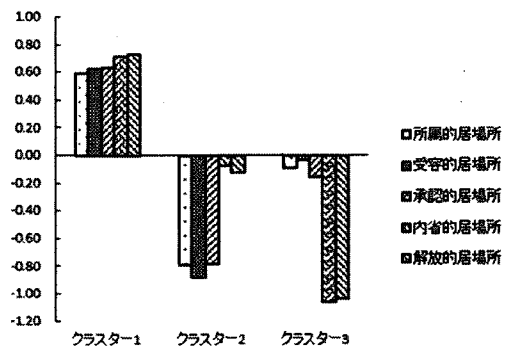


Figure 1 各居場所尺度得点による群分け(クラスター分析)

続いて、これらの3群を独立変数とし、自己肯定意識尺度の各下位尺度得点を従属変数として、一要因分散分析を行った(Figure 2)。

“自己受容”について、居場所充足群が社会的居場所不足群と個人的居場所不足群よりも、高い得点を示した (F(2,438)=22.31, p<.001)。“自

己実現的態度”について、居場所充足群が社会的居場所不足群と個人的居場所不足群よりも、高い得点を示した ( $F(2,438)=44.29, p<.001$ )。“充実感”について、居場所充足群が社会的居場所不足群と個人的居場所不足群よりも、高い得点を示した ( $F(2,438)=65.81, p<.001$ )。“自己閉鎖性・人間不信”について、社会的居場所不足群、個人的居場所不足群、居場所充足群の順に、高い得点を示した ( $F(2,438)=41.00, p<.001$ )。“自己表明・対人的積極性”について、居場所充足群、個人的居場所不足群、社会的居場所不足群の順に、高い得点を示した ( $F(2,438)=29.78, p<.001$ )。“被評価意識・対人緊張”について、社会的居場所不足群と個人的居場所不足群が、居場所充足群よりも、高い得点を示した ( $F(2,438)=5.38, p<.01$ )。

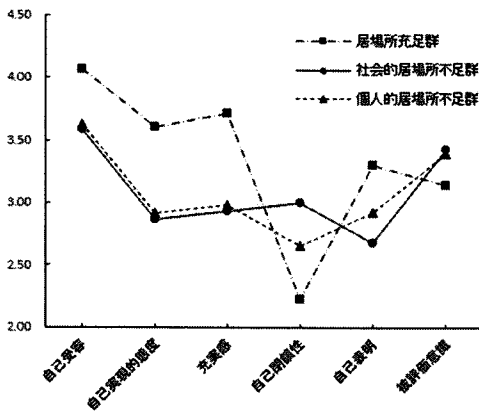


Figure 2 保有居場所の群別による自己肯定意識の各得点

### 各居場所についての性別と生活形態の影響

さらに、性別と生活形態の違いによって見られる各居場所の保持のありようにも妥当な特徴が見られるか検討するため、性別と生活形態を独立変数とし、居場所尺度の各下位尺度を従属変数として、二要因分散分析を行った (Table 4)。

所属的居場所では、性別の主効果のみが見られ ( $F(1,437)=8.12, p<.01$ )、女性の方が男性より高い得点を示した。受容的居場所では、性別の主

効果 ( $F(1,437)=35.96, p<.001$ ) と生活形態の主効果 ( $F(1,437)=5.09, p<.05$ ) がそれぞれ見られ、女性の方が男性より高く、また一人暮らしをしている者の方が同居している者より高い得点を示した。承認的居場所では、性別の主効果のみが見られ ( $F(1,437)=7.72, p<.01$ )、女性の方が男性より高い得点を示した。内省的居場所では、いずれの効果も見られなかった。解放的居場所では、生活形態の主効果のみが見られ ( $F(1,437)=9.65, p<.01$ )、一人暮らしをしている者の方が同居している者より高い得点を示した。

Table 4 性別と生活形態による各居場所得点の二要因分散分析結果

居場所	平均値				主効果 (F値)		交互作用 (F値)
	男性		女性		性別	生活形態	
	独居	同居	独居	同居			
所属的居場所	3.17	2.96	3.28	3.23	8.12 **	3.68	1.41
受容的居場所	2.98	2.78	3.35	3.24	35.95 **	5.09 *	0.38
承認的居場所	2.74	2.65	2.97	2.81	7.72 **	3.31	0.29
内省的居場所	3.14	3.03	3.13	2.99	0.18	3.44	0.07
解放的居場所	2.99	2.84	3.05	2.73	0.14	9.65 **	1.16

\*\*  $p<.01$  \*  $p<.05$

### 5. 考察

本研究で作成した居場所尺度を因子分析すると、社会的居場所は、所属的居場所、承認的居場所、受容的居場所の3因子構造が妥当であると判断された。また、個人的居場所は、内省的居場所、解放的居場所の2因子構造が妥当であると判断された。本研究で再構成した居場所概念に合致する構造が見られ、構成概念妥当性が確認された。

5つの居場所と自己肯定意識との関連を重回帰分析により検討したところ、受容的居場所については、自己実現的態度を低めるという、予想された方向とは逆の結果を得たが、その他についてはすべて自己肯定意識の諸側面との間に妥当な関係が確認された。このことによって、概ねではあるが、基準関連妥当性が確認されたといえよう。

また、居場所の保持の仕方と自己肯定意識との関連を一要因分散分析により検討したところ、自己受容、自己実現的態度、充実感、自己表明・対人的積極性といった肯定的な自己意識については、居場所充足群が社会的居場所不足群や個

人的居場所不足群よりも高い得点を示した。また、自己閉鎖性・人間不信、被評価意識・対人緊張のような否定的な自己意識を喚起するものについては、社会的居場所不足群、個人的居場所不足群が居場所充足群よりも高い得点を示した。これらの結果も、妥当なものであるといえよう。

さらに、性別、生活形態による居場所の保持のありようについて、二要因分散分析により検討したところ、男性よりも女性の方が多く社会的居場所を保持しているという結果を得た。一般的に男性よりも女性の方が親密な他者との関係を多く保有しているという指摘(榎本,1997)を踏まえると、妥当な結果であるといえる。また、一人暮らしをしている者の方が同居をしている者よりも、受容的居場所と解放的居場所を多く保持していることという結果も得た。一人暮らしという生活形態の性質上、同居よりも解放的居場所を得られやすいと考えられる。また、対象者は大学生であることから、一人暮らしの大学生は、時間を気にせずに自由に友人と関わることができ、同居している大学生よりも友人と親密な関係を築きやすいため、受容的居場所を保持できると考えられる。したがって、これらの結果についても、妥当なものであるといえよう。

以上の結果を踏まえると、本研究で作成した社会的居場所尺度および個人的居場所尺度の妥当性が確認されたといえよう。

### 総合考察および今後の課題

本研究では、居場所概念を再整理し、新たな定義に基づいて、居場所の保持の程度を測定する尺度を開発した。作成された尺度は、統計的に信頼性および妥当性が確認されたことから、今後は学校教育現場での活用が期待される。特に、学校適応との関連についての検討がなされることによって、本研究で定義した各居場所の特徴がより明らかになるとともに、学校適応の

向上を居場所の提供の観点から図ることも可能になると思われる。不登校など、児童生徒が示す様々な問題への対応に新たな視座を与えるものとしての活用が、今後の課題であるといえる。

### 引用文献

- 安齊智子(2003)。「居場所」概念の変遷(特集 乳幼児は心の拠り所をどのように形成していくのか) 発達 24(96),ミネルヴァ書房,33-37.
- 榎本博明(1997).自己開示の心理学的研究 北大路書房.
- Ernest S.Wolf,M.D. (1988).TREATING THE SELF:Elements of Clinical Self Psychology. The Guilford Press,New York (アーネスト・S・ウルフ).
- 安村直己・角田豊(訳)(2001).自己心理学入門 コファート理論の実践 金剛出版
- 藤竹暁(2000).居場所を考える(現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ 3ー現代人の居場所ー) 至文堂 pp.47-57.
- 秦彩子(2000)。「心の居場所」と不登校の関連について 臨床教育心理学研究(関西学院大学紀要), 26(1) 97-106.
- 林幸子(2006)。「居場所」としての学級一小・中学生の学校生活の実態からー 大阪大学教育学年報 11,115-127.
- 平石賢二(1993).青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅱ)-重要な他者からの評価との関連- 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 40, 99-125.
- 井上俊・船津衛(2005).自己と他者の社会学 有斐閣アルマ
- 石本雄真(2010).青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響 発達心理学研究 21(3),278-286.
- 岩川直樹(2006).居場所という原点ー目的志向の活動から存在志向の場づくりへー 子どもの権利研究(8),4-9.
- 梶原康史(1993)。「心の居場所」論が登校拒否を減らせるか 児童心理, 47, (8), 97-104.
- 木全力夫(1999).家庭・地域に於ける「子どもの居場所」の教育的意義 創大教育研究, 8, 39-51.
- 北山修(1993).自分と居場所 岩崎学術出版社



- 宮下敏恵・石川もよ子 (2005) .小学校・中学校における心の居場所に関する研究 上越教育大学研究紀要,第24巻②,783-801.
- 文部科学省 (2003) .学校不登校対策調査研究協力者会議最終報告 今後の不登校への対応の在り方について(報告),19-20.
- 文部省 (1992) .学校不適應対策調査研究協力者会議報告「登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して—」
- 中西友美 (2000) .若い世代の母親の居場所感についての基礎的研究 臨床教育心理学研究 (関西学院大学), 26 (1) 87-96.
- 中島喜代子・廣出円・小長井明美 (2007) .「居場所」概念の検討 三重大学教育学部研究紀要 58, 77-97.
- 則定百合子 (2007) .青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集 (49) ,337.
- 萩原健次郎 (1997) .若者にとっての「居場所」の意味 日本社会教育学会紀要(33), 37-44.
- 大久保智生・青柳肇 (2002) .青年用適応尺度作成の試み—居場所の視点から— 日本教育心理学会総会発表論文集(44),320.
- 杉本希映・庄司一子 (2006) .「居場所」の心理的機能の構造とその発達の變化 教育心理学研究 54(3), 289-299.
- 住田正樹・南博文 (2003) .子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 pp.3-17.
- 竹森元彦 (1999) .心の発達における居場所の役割 鳴門教育大学研究紀要 (14), 127-136.
- 田中麻貴・田嶋誠一 (2004) . 中学校における居場所に関する研究 九州大学心理学研究 5,219-228.
- 田中治彦 (2001) .子ども・若者の居場所の構想—「教育」から「関わり場」へ 学陽書房 pp.3-12.
- 泊真児・吉田富二雄 (1999) .プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係 社会心理学研究 15(2), 77-89.
- 辻平治郎 (1993) .自己意識と他者意識 北大路書房
- 堤雅雄 (2002) .「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要,人文・社会科学 36,1-7.
- 若山隆 (2001) .こころとからだの在るところ—私たちの居場所の問題— 日本福祉大学研究紀要—現代と文化 (105),67-82.
- 山岡俊英 (2002) .大学生の居場所とセルフエスティームに関する研究 佛教大学教育学部紀要 1,137-167.

#### 付記

本研究は、2012年度金沢大学教育学研究科修士論文に加筆修正を加えたものであり、本研究の一部は、日本教育心理学会第53回総会において発表したものである。